写真１：浅草寺公園内銭塚地蔵尊、この拝殿裏に金保元泰の供養碑がある

写真２：多紀文恵（安元）の建てた金保元泰の供養碑（慧日院法橋日悟大居士）、慧は恵の誤り

多紀元堅の墨跡

町　泉寿郎・小曽戸　洋

江戸幕府医官多紀家の桂山元簡の子で、分家して後に矢の倉多紀家を立てた茝庭元堅は、考証学派の大成者の一人と目すべき人物であり、その漢学の素養は医学館ともかかわりの深かった井上金峨・亀田鵬斎・大田錦城・海保漁村等、いわゆる折衷学派乃至考証学派の大儒たちの影響下にある。元堅の著書『時還読我書』には屢々「錦城先生曰ク」として大田錦城の言説が引かれる。錦城の曽孫淳軒大田才次郎の『旧聞小録』には錦城を師とし錦城三男晴軒を友とした元堅の逸話を載せる。

元堅の学殖は文人と呼んで差し支えない域に達しているその書画の遺品からも窺うことができる。そのいくつかを以下紹介する。

(1)「録楊潛邨之語」（中山沃氏所蔵）
文政十年十二月、元堅三十三歳の書。

(2)孫志宏の語（矢数道明氏所蔵）
『簡明医彀』（崇禎三・一六三〇年刊）巻之一「要言十六則　業医須知」の「先輩云……自存徳行也」を録す。

(3)蘇洵の語（矢数道明氏所蔵）
「張益州画像記」（『嘉祐集』巻十四・『唐宋八大家文読本』巻十

七所収）の「未乱易治……不可以無乱弛」を録し、「余謂医理亦如此」（余謂へらく医理も亦た此くのごとし）と識す。嘉永元年十一月、五十四歳の書。

(4) 多紀元胤七律（矢数道明氏所蔵）

新水平堤草和烟　物光無処不春妍
詩魂入夢清明暁　酒思関心社日天
鴈謝燕来如有約　花濃柳韡以有憐
墨江遊舫東台路　乗興随群楽少年

録柳汀先生春遊詩于三松斎中　堅

三松斎は弘化二年十月（五十一歳）以降居住した浜町元矢の倉邸の書斎号である。

(5) 自詠七絶（大塚恭男氏所蔵）

星光欲没暁光連　霞暈紅浮一角天
乾尽花上露　日痕恰々到窓前

庚戌小春月　三松老人劉元堅書

嘉永三年三月、五十六歳の書。

(6) 「倣新羅山人画本」（個人蔵）

清代の画家華嵒の画本に拠り、蓮荷の挿された瓶に石菖を配し、水墨にて描く。

(7) 水墨山水図（日本大学医学部図書館所蔵）

「安政乙卯上元後三日写于三松斎為稲葉用晦緑汀老人堅」と識す。安政二年一月十八日、六十一歳の作。用晦は筑前藩医元熙。

(8) 丹波経長読本草和歌（日本大学医学部図書館所蔵）

〈教をく其ことのはをたよりにて
　四方の草木のこゝろをそしる

丹波経長は康頼八代の孫で鎌倉期の医者。和歌を好み『続後撰集』中の右の歌など五首が勅撰集に入集している。『続後撰』中の同歌と若干の異同があり、関連記事が『時還読我書』上巻五十二丁にある。

(9) 松延定雄宛書簡（東京都立中央図書館蔵、渡辺刀水旧蔵書簡類）

重陽之華翰到来、拝見仕候。先以近々秋暑復甚候処、愈御勝常被成御起居、奉賀候。然は御守殿様御容体委細申上候処、早速被仰上、御満悦被遊候段、難有奉存候。御案事被遊候通、此上御引日之処ハ何とも難申上、乍恐心配仕居候儀ニ御座候。乍併其後は御熱気次第ニ御解散被遊、両三日は多分ハ不被為在与奉存候位之御事、御痰漱も大ニ御穏ニ而夜中も毎御静寝被遊候。右ニ付最早清涼を主と仕候ニも及不申と奉存候間、昨日ゟ四陰煎加柴胡ニ御転方、且先日差上候寛快湯も一服で御兼用差上申候。何分此御上ハ時令之御感触不被為在、且は御精神御舒緩被為在候様奉祈候御儀ニ御座候。且又御礼奉申上候ハ、不存寄御名産之赭鱈三頭頂戴仕、難有仕合奉存候。御礼可然被仰上候様、奉御申候。右等奉復度、匆々如此御座候。頓首。九月十三日　多紀楽真院

松延定雄様　尚々、時下折角御自愛被成候様奉存候。尚後音万可申述候。以上。

（平成七年十月例会）